

アトリエ 琉游舎 だより 235号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年7月15日発行

有縁無縁の精霊を思い感謝する日

お盆施餓鬼法要

8月9日（日） 10時半から

- お盆は祖先の霊を供養する行事です。この期間には祖先の霊が子孫や家族の元に帰って来るとされ、盆踊り、精霊流し、迎え火、送り火などの様々な行事が営まれます。日本人は古来より、祖先への感謝と供養の気持ちが仏教の考えと融合し今も生活の中に定着しています。
- 施餓鬼会は貪り苦しむ餓鬼に対し飲食を施し、先祖代々や広く無縁の諸精霊を供養する法要です。自分の命はすべての生命と繋がっていることを自覚し、自らの欲や貧りを反省するとともに生きとし生けるものすべてに感謝し思いを巡らす大切な法要です。
- 施餓鬼は餓鬼への施しを通じて、布施・慈悲の実践を行う修行として位置づけられています。その功德を先祖や有縁無縁の精霊に回向することで広く死者供養の法会となり、施主自身の貪・瞋・痴を浄化する機会と説かれ、単なる追善供養を超えた意味をもっているのです。
- 琉游舎ではお盆と施餓鬼会を融合して「お盆施餓鬼法要」を行います。有縁（親や祖先）の精霊だけではなく、有縁・無縁を問わないすべての精霊への供養と回向の法要です。
- 一年に一回、自分の近い故人や祖先に思いをめぐらし感謝し、また永遠の過去から永遠の未来までの、有縁無縁の精霊を思い感謝し供養する日にいたします。また受難、殉難、遭難、自然災害、人為災害、戦争、病没、公私問わず、有史以来亡くなられたすべての方へ供養・回向し、私達の安寧と生きとし生けるものの平和を祈念いたしたいと思います。
- ただ祈念すれば何事も叶う訳ではありません。大切なことは神仏にお願いすることではなく、私たちが「願い、誓い、行う」ことです。家内安全息災延命などを願い、有無両縁の精霊の前で願いを誓い、日々の生活の中で願いのままに行うことが、私たちが法要を行う真の意味、目的です。琉游舎がともに「願い、誓い、行う」場となるよう、お待ちしております。

写経会 8/2（日） 13時半 読書会 7/21・8/4（火） 13時半

狂言綺語…保守

今年が昭和100年の年に当たると言うことで、昭和天皇の誕生日である4月29日に昭和100年記念式典が開かれました。ニュースではあまり報じられていなかったのですが、その式典の内容は知らなかったのですが、ネットではご臨席を賜った天皇皇后両陛下のお言葉がなかったことが議論を呼んでいるようなので、内閣府のホームページで案内されている式典の動画を見ました。昭和という時代を未だに総括できないままに、平成、令和と権力を行使してきた為政者たちが、100年という節目に元号や天皇の権威と権力、天皇の存在の意味を、どのように位置づけるか注目に値する式典だったはずですが、ところがあまりにもお粗末で幼稚な内容に私は唖然としてしまい、途中で見るのをやめてしまいました。今までの曖昧で八方美人のような総括もどきには、まだ昭和を総括しきれない迷いのままに、何かを語らねばとの意志は感じられていました。しかし今回の保守を自認する人達の挙行する式典は、語る言葉を放棄した昭和歌謡の祭典と化していたのです。

昭和は戦前の大日本帝国憲法の時代と、敗戦後の日本国憲法の時代とを分割して語られることが多いように思えます。しかし日本の元首である昭和天皇は、国体である天皇と象徴である天皇とで体制は異なりましたが、存在としては連続したものです。元号の昭和と機能としての昭和天皇は本来一体化しているものと考えべきだと思います。戦前と戦後は連続した昭和です。連続性の中で、真摯に過去の事実をありのままに見つめ、それを真実として今に伝える努力を怠ってきた付けが、この式典にも現われていました。当時の為政者の誰もが侵略戦争の理念を説明できないままに始めてしまった戦争から、昭和天皇以外やめることを決断できなかった敗戦へ、そしてアメリカの占領下から未だに脱却できず現在に至る日本の歩みを象徴している式典です。過去の事実を無かったことにするか、書き換えて捏造してそれを歴史認識という名で糊塗することで、昭和という時代の事実を100年たった今日も未だに知ろうとしない伝統的な為政者の姿がここにもありました。我こそは伝統の保持者、保守と自負もし、支持を得ているようですが、もしそれを伝統の保守というならば、藤原氏以来今日まで天皇家を傀儡として権力を行使してきた貴族、武家、政治家の伝統をそのまま保守しているに違いないのです。為政者の傀儡である天皇家を保守し続けることが令和の今も権力者の意志であることがはっきりしたことは明白です。為政者の皇室に関わる法律を含めたあらゆるアクションが、天皇を傀儡としてきた伝統の維持に他ならないと言うことを私たちは今更ながら認識した次第です。

「保守せんがために改革せん」とは英国の保守党理論家、エドモンド・パークの言葉です。この言葉は真性保守の真髄を表わしています。守るべきもの（国家や伝統）を固定化して硬直させれば、時代の変化に適應できず、還って崩壊を招いてしまうでしょう。根本的な理念や価値を堅持(保守)しつつも、表面的な仕組みや制度を時代の変化に合わせて自発的に変えていく(改革)との考え方です。政治の、特に政策立案者の役目は客観的に誰もが理解し納得できる過去の事実や現在のデータに基づき明日を設計し、未来の方向性を示すことです。その責任者の語った次の言葉には何処にも事実(客観性)を発見することができません。「皇室についての議論は非常に重い。初代の神武天皇から126代にわたり、様々な過程を経ながらただ一度の例外もなく、男系で継承されてきた。世界に唯一無二の伝統と重みを謙虚に受け止める必要がある。」神武天皇は127歳まで生きました。10代の崇神天皇は168歳です。これを事実と認定するならば当時の人は長寿で医療も栄養も今より優れていたと考えるしかありません。それとも天皇だけには特別な神通力が備わっていたのか、はたまた捏造の産物か。その評価を私はするつもりはありません。それを盲信し、それが日本の伝統であり、それを保守することが自分達の利益のためと考える人達に、過半数の人達が信任の札を入れたと言う事実があるからです。私は政治的なことを語るつもりも、今後も語ることもありません。私が問いたいことは日本人の保守すべき国家や伝統は何かと言うことです。それを作り上げてきた日本人の精神は何かと言うことです。これを政治の問題にしてはなりません。なぜなら利権の問題にすり替え可能だからです。私たちがそれを問うことは日本人とは何か、何を考え何を行い、何を願って歩んで来たのかを問うことです。私たちのアイデンティティを問うことなのです。それを為政者が捏造することを許してはならないのです。

私は日本人のアイデンティティを「カミとホトケの出会い」に観ることができるのではないかと考えてきました。学者ではなく実践家なので、これを論理で立証することは私にはできません。それでも実在のお釈迦さまに始まるホトケが、中国を経て日本に移入され、そしてカミと融合して今に至る変遷を辿ると、まさしく「保守せんがために改革せん」の姿勢に貫かれていることがよく分ります。お釈迦さまが教えてくれた世界の捉え方、「縁起の法則(空、ありのまま)」が仏教の守るべき原理です。その土台に、どうやれば私たちは一切皆苦の世界から逃れる(解脱)ことができるかを、お釈迦様の弟子たちが、何世紀にもわたって追求してきたからこそその仏の教えです。お釈迦さまの教えを保守せんがために改革され続けた仏教が、今ここにある仏教です。私は、お釈迦様から連綿と保守され、改革され、日蓮聖人の革命的な変革の後もまた飽くなく改革が続けられた教えを、今受け取ることができ、それを未来に繋げようとしている一人なのです。

カミとホトケが日本人の精神と智慧を形作ってきたという私の仮説には、無論そのカミの一翼を担った天皇の存在もあります。カミが私たちの精神の柱になっているとするならば、天皇は各々の日本人の総体である国民統合の象徴です。憲法に記されている通り80年間国民の統合の柱となってきたのです。守るべき伝統は言うまでも無く、この統合の柱である天皇の精神的存在です。それを形式に拘ることが伝統を保守することだとして精神を蔑ろにした時、本末転倒、日本人の保守すべき精神は崩壊することでしょう。合掌